

放送大学オンライン授業科目における未修了の原因および 修了者の不満要因の量的および定性的研究

山 岡 泰 幸¹⁾・青 木 久美子²⁾・高 橋 秀 明³⁾・清 水 仁⁴⁾

Quantitative and qualitative studies on the causes of drop-out and dissatisfaction among the students enrolled in online courses at the Open University of Japan

Yasuyuki YAMAOKA, Kumiko AOKI, Hideaki TAKAHASHI, Hitoshi SHIMIZU

要 旨

放送大学において2015年度に始まったオンライン授業科目は、Vision '17でも注目されているように、学生層の拡大、及び、学生の学修における柔軟性の強化、また、教員にとっては、新たな教授法の開発など、放送大学にとって従来の放送授業科目と面接授業科目に並ぶ第三の柱となってきている。しかしながら、履修登録したにもかかわらず、未修了となってしまった学生が一定割合存在する。放送大学にとって新しい授業形態であるオンライン授業科目において、未修了の原因、及び、修了者の不満要因の量的および質的分析を行い、今後改善すべき点を精査することは、喫緊の課題である。

そこで本研究では、2017年度第1学期オンライン授業科目受講者を対象にWebアンケート調査を実施し、669人の有効回答を得た。回答の分析においては、まず、量的分析を行い問題点の絞り込みを行った。次に、未修了者29名へ電話による聞き取り調査を行い、会話ログから定性的分析を行った結果、授業内容や授業の質そのものよりも、オンライン授業の運営オペレーションにおいて、いくつかの改善すべき点が明らかになった。最後に修了者32名にも聞き取り調査を行った結果、修了者の多くはデジタルリテラシーが高く、オンライン授業に更なる双方向性を期待していることがわかった。

キーワード：遠隔教育、オンライン授業、未修了、不満、要因

ABSTRACT

Full online courses were started in the fiscal year of 2016 at the Open University of Japan (OUJ). As mentioned in "Vision '17", it is a pressing issue for OUJ to expand its student population and strengthen the flexibility in student learning. In addition, online courses have become the third pillar of its educational system for OUJ in line with the traditional broadcast courses and schooling courses. It has been noted that there is a certain percentage of students who have not completed the courses after their registration. It is imperative for OUJ to know the causes of such incompleteness. In this study we conducted quantitative and qualitative studies on the cause of incompleteness as well as the factors of dissatisfaction with regards to online courses for their further improvement.

In this research, an online survey was conducted for the students who registered for online courses in the first semester of 2017, and 669 effective answers were obtained. In the analysis of responses, we first performed quantitative exploration and narrowed down the problems. Next, we conducted telephone interview on 29 students who had not completed the courses, and qualitatively analyzed the conversation log. The result suggested the need for improvements in the operation of online courses rather than in the content or quality of the courses. Furthermore, the telephone interview of 32 students who completed online courses showed that those were digitally adept and

¹⁾ 放送大学研究補助員

²⁾ 放送大学教授 (「情報」コース)

³⁾ 放送大学准教授 (「心理と教育」コース)

⁴⁾ 放送大学研究補助員

would expect higher interaction in online courses.

Key words : distance learning, online course, drop-out, dissatisfaction, factors

1 はじめに

そもそも、放送大学とはどのような教育機関であろうか。過去に戻ると、政府として放送大学の検討を開始したのは、1969年10月の閣議においてであった。紆余曲折の後、1981年6月の第94国会において、ようやく「放送大学学園法案」が成立した。法律の成立により、放送大学学園は1981年7月に発足した。放送大学は、必要な準備を整えて、教養学部を置く正規の大学として1983年4月、千葉市美浜区幕張新都心に設置され、1986年度から関東地区の学生を受け入れた。電波割当ての制約から、主として南関東地域を対象に、テレビではUHF波、ラジオではFM波による授業番組の放送を開始した（文科省・学制120年史編集委員会、2009）。

第1回卒業式は1989年に挙行されたが、日本全国の学生を受け入れる設備が整ったのは、その9年後の1998年10月であった。その後も進化を続け、2002年4月からは大学院生を受け入れた。また、2007年4月には一部科目のインターネット配信を開始した。2011年にBSデジタル放送の開始。2014年4月から博士後期課程を募集し、2014年10月から博士全科生を受け入れている（放送大学沿革、2013）。

さて、これまでの放送大学の二つの教育手段、すなわち、テレビ・ラジオの放送授業と面接授業に加えて、三つ目の柱として、オンライン授業が2015年度から試験的に開設され、翌年全面開設された。学生にとって画期的なことは、小テストやレポート、フォーラムなどに参加することによって記憶の定着や主体的な学びが促進されること。また、オンライン上で成績評価がなされることで、これまでのように単位認定試験を各地の学習センターで受験しなくても良いこと（一部科目を除く）。また、教養学部の卒業に必要な124単位のうち、「面接授業及びオンライン授業で修得すべき最低単位数（20単位）」として認定されること。この二点が大きな特徴である。面接授業や単位認定試験は日程が決まっていることから、日程調整が難しい学生、学習センターに出向くことが様々な理由で困難な学生にとっては、ハードルの高い受講形態であった。上記の仕組みを持つオンライン授業は、2007年に導入されたインターネット配信とはまったく別物である証左である。

このように、「いつでも・どこでも」を具現化するオンライン授業であるが、開設から丸二年経過したところで、単位を修得できない学生が少なからず存在することが明らかになりはじめた。将来のオンライン授業の拡張のためにも、問題点は小さなうちから取り除く必要がでてくる。どのような属性を持つ学生が、ど

のような場合につまずくのか？これを明らかにするのが本研究の目的である。本研究は、定量・定性の二つの分析で進めた。

2 遠隔教育の特徴

1983年の放送大学設立当時の理念に、遠隔教育の目的がよく現れている。それは、(1) 高等教育を受ける機会に恵まれなかった人々に、働きながら高等教育を受ける機会を保障することにより、日本社会の高等教育のセーフティーネットとして機能すること。(2) 放送という教育手段を活用して、日本の高等教育の全体に貢献すること。(3) 放送を視聴する国民一般の教養水準の向上に資すること、の三点であった（放送大学、2017）。

欧米においては、インターネットを介した遠隔教育は1990年代にパーソナルコンピュータ（PC）とインターネットが家庭に普及し始めた頃と同期するように急速に発展した。すなわち、場所を選ばない、時間を選ばない、自分のペースで学習を進めることができるという特徴をとらえ、効果的な遠隔教育方法が多くの研究者たちによって開発された（Aoki & Pogroszewski, 1998）。

2.1 放送大学の学生の学習スタイル

日本では大学教育を受ける年代が高校卒業の直後から20歳半ばまでという年齢層、かつ、教室・面談形式の授業を受けることが一般的である。しかし、放送大学の創立理念からして、この枠から逸脱した人々を救済する目的があり、1983年の創設から2017年9月末までの学部と大学院を合わせた卒業・修了生が10万人を超える実績を出し、創立35年目を迎えている（放送大学プレスリリース 2018）。

放送大学の学生は社会人、主婦層、企業を定年退職した人など、さまざまな経歴を持ち、かつ、幅広い年齢層で構成されている。当然、20代を中心とする一般の大学とは構成員が違う。このような大学において、学生の個々の学習スタイルを考えることは重要である。なぜならば、学費を自分でやりくりして支払うという行為は、親に学費を払ってもらいながら学ぶ一般の若年層の学生とは学習意欲の点でスタートラインが違う。放送大学生の方が学習意欲が高いのである。

青木（2005）は、学習スタイルの概念と理論の研究から個々の学習者の学び方の個人差を見据え、適切な学習アプローチについて考察した。例えば、人が様々な違った学習環境において、どれだけ一貫性を持って取り組むかに着目すると、Vermunt（1992）が興味深い分類を行っている（表1参照）。4つのスタイルと5つの領域を20のマトリックスにしたものである。

表1 Vermuntの学習スタイル

	意義中心的	応用中心的	模倣中心的	無目的
知覚処理	主要概念感の関連性を探し、概要を作る	学習科目を日常の生活体験に関連づけて考える	主要な点を見つけ、記憶する	勉強をすることが困難で、何度も同じ所を読み返す
学習動機	自己改善と自己開発	職業的、または実社会に役立つ結果	よい成績を獲得	よくわからない
感情変化	本質的興味と楽しみ	実践的な詳細に興味	忘却に対する恐れ	失敗に対する恐れと自己不信
精神的モデル	専門家との意見交換によって啓蒙される	知識を活用するために学ぶ	講義ノートを見直し、試験にパスする	先生の助けを欲し、同僚の支援を求める
学習規制	興味と疑問によって導かれ、理解不足を訂正する	問題と事例を考え、自分の理解を試す	目的に沿って理解度のチェックを繰り返す	適合性なし

意義中心的な軸で学習動機と感情変化を見ると、「自己改善と自己開発」、「本質的興味と楽しみ」。応用中心的な軸では、知覚処理として「学習科目を日常の生活体験に関連づけて考える」、学習動機では「職業的または実社会に役立つ結果」を求めていることが分かる。これは、まさに放送大学生の特徴といえるのではないだろうか。

2.2 遠隔教育の欠点の顕在化

脚光を浴びたインターネットを介した遠隔教育であったが、多くの学習者に浸透してくると、様々な問題点が顕在化しはじめた。例えば、Phipps and Merisotis (1999) は、遠隔学習における高い脱落率に言及し、教育の中での人と人とのコミュニケーションの重要性に触れた。また、Sherry (1995) は、成功要因について、講師と学習者の相互作用、すなわち適切なサポートと適時の助言が不可欠であると主張している。費用対効果のトレードとなり、これらが無ければ失敗率の上昇が見込まれることを明らかにした。Galusha (1997) は、遠隔教育を受ける学習者は、孤独であり、学友の助けや励ましから隔離される。遠隔教育を行う組織は、テクニカルアシスタントを用意し、学習者のちょっとした質問を受ける仕組みを用意すること、また、機材・PC・インターネット環境などのハードウェアについての支援も大切であるとした。

教育のコンテンツについても、初期は、授業型の講義をそのまま遠隔授業で使うことで始まったが、発展とともに、独自のコンテンツを用意するようになった。このこと事態は良いことであるが、山田 (2011) は次のような問題点を指摘している。「共有利用に配慮したデザインをとらないものが多く、助成の終了とともにコンテンツの改訂ができず、持続可能性という点で課題を残した」。

振り返って、放送大学のオンライン授業では、学習者が満足して受講しているのだろうか、または、問題点を抱えながらもやりくりしているのか。未修了者は、どのような点でつまづいたのかを次章以降の実証研究で明らかにしてゆく。探索的方策として始めに量的分析を行い、最終的・確認的な方策として質的分析を行う。

3 アンケート調査と量的分析

放送大学のオンライン授業を受講した学生がどのような感想を持っているのか、また、どのような問題点があるのかを探る目的で、2017年11月にアンケート調査を行った。対象者は2017年度第1学期のオンライン授業科目登録者延べ4991名である。メールアドレスの記載があった受講生4489名にメールを出した（図1参照）。

メールにはWebアンケートのURLを記載して、回答を促した。Webアンケートの作成には独立行政法人メディア教育開発センターが研究・開発した、REAS: Realtime Evaluation Assistance System (リアルタイム評価支援システム) を使用した。結果として669名の有効回答があった。回収率は14.9%である。アンケート内に「電話インタビューの参加が可能であるか?」の質問を入れてあり、参加同意を表明した者は177名であった。同意者のうち、一つの科目でも未修了であった者は30名であった。

この30名を未修了者とし、電話インタビューに先立ちデータ・クレンジングをしたところ、1名が偽名を使っていたため、対象データから削除し、実質29名に対する調査となった。また、修了者に対する聞き取り

放送大学のオンライン授業科目を履修登録された皆様へ。

このメールは、2017年度第1学期に、放送大学のオンライン授業科目に履修登録された皆様にお送りしております。本学では2015年よりオンライン授業科目をご提供しており、現在合計26科目となりました。このオンライン授業のさらなる改善のために、皆様方からの忌憚のないご意見をいただきたいと思います。

下記のURLをクリックしていただき、アンケートにご協力をいただければ幸いです。
<https://reas.code.ouj.ac.jp/reas/q/.....>

当アンケートの回答は授業改善以外には一切使用せず、第三者に提供することはありません。結果はすべて統計的に処理されますので、あなたの個人情報公になることはありません。ぜひ、明日のオンライン授業の改善のため、あなたのお力をいただきたいと思います。甚だ恐縮ですが、11月12日(日)午後10時までにご回答下さい。(アンケートの所要時間は約5分です。)

尚、上記のアンケートにも書かれておりますが、当アンケートで十分にお聞きできなかったことについて、ぜひ、電話でお話をお聞かせいただければと思っております。ご同意いただける方は、ぜひアンケートの最後の欄にご記入下さい。どうぞよろしくお願いいたします。

放送大学・オンライン教育センター評価研究グループ・アンケート担当係

図1 アンケート調査の依頼文

調査も併せて実施し、修了者147名の中から32名の聞き取りをすることができた。

3.1 全受講者へのアンケート調査

有効回答の669名の属性は、図2に示すように次のようになった。性別：女性345名、男性324名。年齢別：20代38名、30代84名、40代185名、50代213名、60代109名、70代35名、80代5名。学士修士別：学士574名、修士95名。修了未修了別：修了551名、未修了94名、一部未修了24名。履修生別：全科履修生400名、科目履修生105名、修士全科生26名、修士選科生52名、修士科目生12名、である。

表2は本アンケートで行った満足度調査の質問項目である。リッカート5段階法を用い、(5)非常に満足した、(4)満足した、(3)どちらとも言えない、(2)不満であった、(1)非常に不満であった、のどれかを選択することを求めた。

なお、満足度調査の質問内容は表2に示す。これらの設問は、2016年度に行った第一回オンライン授業受講者実態調査で、グループインタビューによる調査の結果、受講者たちが高い関心を持っている項目であっ

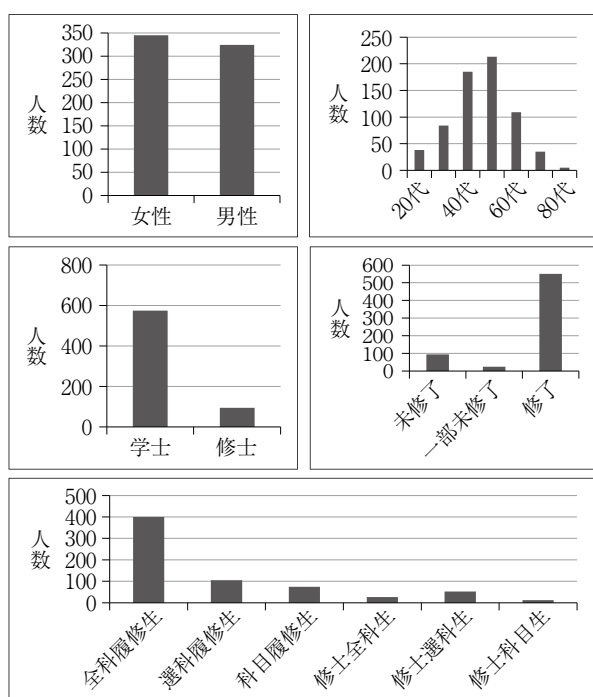


図2 アンケート回答者の属性 (n=669)

たことから、今回採用した。

表3は、各質問項目の順序尺度を比率尺度と見なし、平均値と標準偏差とを求めたものである。高い平均値群は上から、講師の説明の仕方について、動画（講義ビデオ）について、小テストについてであった。反対に、低い平均値群のものは下から、学生同士のやり取りについて、ディスカッションについて、担当講師とのやり取りについてであった。これら三項目の特筆すべき点として、他の質問項目と比べ学生が実際に体験していない割合が高く、Missingが多い。表4の質問項目ごとの割合を見ると、講師の説明の仕方は満足（4ないしは5）をつけた学生が多く、一方、学習量について、および、学生同士のやり取りについては満足ではない項目（3、2ないしは1）を選択した学生が多くいる。

さて、表4の度数分布表ではイメージが掴みにくいので、リッカート法の5段階から3段階に単純化して、視覚化を試みる。(5)非常に満足した、(4)満足した、を合成して「満足」とし、(3)どちらとも言えない、はそのまま「どちらでもない」とし、(2)不満であった、(1)非常に不満であった、を合成して「不満」と置いた。これらを満足%の高い順に並べ直したものが図3の各質問項目の回答割合グラフである。リッカート5段階法の平均値の順序に似通った結果となるが、満足度%の高いものから三つあげると、講師の説明の仕方（76.4%）、動画（講義ビデオ）（71.8%）、そして、小テスト（70.0%）である。反対に満足度の低いものを三つあげると、学生同士のやり取り（25.5%）、ディスカッション（31.1%）、そして担当講師とのやり取り（40.4%）となった。

表2 アンケート満足度調査質問項目

単位を取得された科目について、下記のそれぞれについて評価をしてください。(必須)

- (1) 教材（テキストや講義ノートなど）についてどうでしたか？
- (2) 動画（講義ビデオ）についてどうでしたか？
- (3) 講師の説明の仕方についてはどうでしたか？
- (4) 小テストは
- (5) レポート（課題）は
- (6) ディスカッションは
- (7) 学習量について
- (8) 担当講師とのやり取りについて
- (9) 学生同士のやり取りについて

表3 各質問項目の記述統計

	教材（テキスト・講義ノート等）	動画（講義ビデオ）について	講師の説明の仕方について	小テストは	レポート（課題）は	ディスカッションは	学習量について	担当講師とのやり取りについて	学生同士のやり取りについて
N Valid	641	650	657	657	610	386	640	371	329
Missing	28	19	12	12	59	283	29	298	340
Mean	3.66	3.79	3.89	3.78	3.69	3.22	3.71	3.38	3.16
Std. Deviation	0.93	0.90	0.78	0.82	0.84	0.91	0.78	0.88	0.79

表4 各質問項目の度数分布

	5	4	3	2	1
教材	15.3	50.2	22.6	9.4	2.5
動画（講義ビデオ）	18.8	53.1	19.4	6.3	2.5
講師の説明の仕方	18.4	58.0	18.7	4.0	.9
小テスト	16.0	54.0	23.6	5.0	1.4
レポート（課題）	13.6	51.3	27.7	5.6	1.8
ディスカッション	9.6	21.5	54.7	9.8	4.4
学習量について	13.1	50.6	30.9	4.4	.9
担当講師とのやり取り	10.5	29.9	50.4	5.4	3.8
学生同士のやり取り	5.5	20.1	62.9	7.9	3.6

満足度の高い項目は、さらに強みを伸ばすべきであるし、満足度に低い項目は、その原因を探り改善を試みるべきであろう。

3.2 属性別分析

回答者全体の傾向がつかめたので、次に、属性別分析として、男女別、学部・大学院別、未修了・修了別、そして、年齢別に平均値比較をみてゆく。

まず、男女別で平均値に違いがあるかt検定を行ってみた。P<5%有意になったものは、動画（0.003）、講師の説明（0.025）の2つの項目であり、かつ、平均値は表5で示すように、女性の方が高く出た。女性のほうが、設問に対して寛容であるか、又は、オンライン授業に対する受容度が高いと思われ、興味深い結果となった。

次に、表6に示すように、学部科目と大学院科目との比較では、同様にt検定のP<5%有意になったものは、講師の説明の仕方（0.017）、小テスト（0.001）、

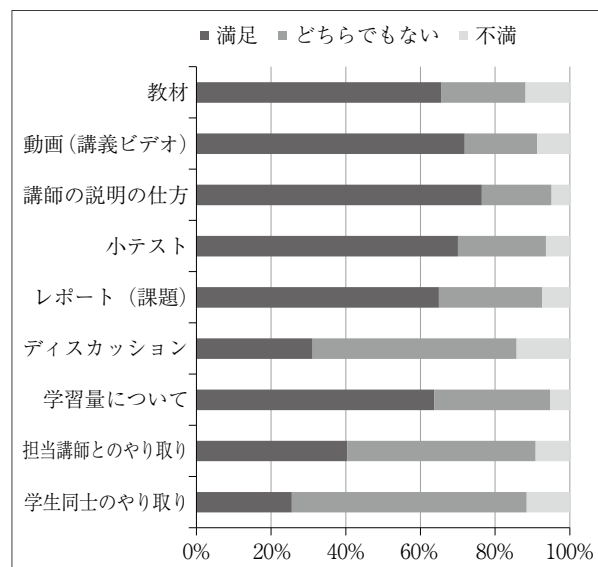


図3 各質問項目の回答割合

レポート（0.005）、学習量（0.007）、担当講師とのやり取り（0.005）の5項目であった。いずれも大学院科目が高い平均値を取っており、学部生に比べて大学院生の学習意欲の高さがうかがえる。

三番目に未修了・修了者別の平均値比較を行った。t検定のP<5%有意になったものは、9項目すべてであり、かつ、p値は9項目すべてが0.004以下を示した。このことは未修了者は明白に修了者と比較して、満足していないことを示している（表7参照）。

最後に年代別の平均値比較を行った。t検定は対のグループの比較に有効であるが、ここでは複数グループの比較であるから、分散分析手法の一つである、

表5 男女別の平均値比較

		N	Mean	Std. Deviation	Std. Error Mean	t	df	Sig. 2tailed (p)	Mean difference	Std. Error difference
教材	女性	332	3.70	.875	.048	1.045	616.337	0.297	0.077	0.074
	男性	309	3.62	.988	.056					
動画（講義ビデオ）	女性	336	3.90	.768	.042	2.972	581.045	0.003	0.211	0.071
	男性	314	3.68	1.017	.057					
講師の説明の仕方	女性	341	3.96	.712	.039	2.247	621.737	0.025	0.136	0.061
	男性	316	3.82	.833	.047					
小テスト	女性	341	3.83	.750	.041	1.630	618.694	0.104	0.105	0.064
	男性	316	3.73	.888	.050					
レポート（課題）	女性	304	3.67	.798	.046	-0.559	608.000	0.576	-0.038	0.068
	男性	306	3.71	.881	.050					
ディスカッション	女性	191	3.17	.904	.065	-1.014	384.000	0.311	-0.094	0.093
	男性	195	3.27	.914	.065					
学習量について	女性	328	3.76	.759	.042	1.651	638.000	0.099	0.102	0.062
	男性	312	3.65	.807	.046					
担当講師とのやり取り	女性	162	3.36	.861	.068	-0.422	369.000	0.673	-0.039	0.093
	男性	209	3.40	.904	.063					
学生同士のやり取り	女性	155	3.19	.782	.063	0.770	327.000	0.442	0.067	0.087
	男性	174	3.13	.795	.060					

表6 学部・大学院別の平均値比較

		N	Mean	Std. Deviation	Std. Error Mean	t	df	Sig. 2tailed (p)	Mean difference	Std. Error difference
教材	学士 修士	546 95	3.64 3.82	.945 .838	.040 .086	-1.778	639.000	0.076	-0.184	0.103
動画（講義 ビデオ）	学士 修士	557 93	3.77 3.94	.924 .749	.039 .078	-1.637	648.000	0.102	-0.165	0.101
講師の説明 の仕方	学士 修士	563 94	3.87 4.04	.793 .638	.033 .066	-2.406	145.653	0.017	-0.178	0.074
小テスト	学士 修士	562 95	3.74 4.01	.837 .676	.035 .069	-3.426	147.341	0.001	-0.267	0.078
レポート （課題）	学士 修士	516 94	3.66 3.90	.848 .763	.037 .079	-2.861	138.335	0.005	-0.249	0.087
ディスカッ ション	学士 修士	341 45	3.19 3.47	.914 .842	.049 .126	-1.942	384.000	0.053	-0.279	0.144
学習量につ いて	学士 修士	549 91	3.67 3.91	.787 .740	.034 .078	-2.718	638.000	0.007	-0.240	0.088
担当講師と のやり取り	学士 修士	318 53	3.33 3.70	.881 .845	.049 .116	-2.855	369.000	0.005	-0.371	0.130
学生同士の やり取り	学士 修士	286 43	3.15 3.19	.797 .732	.047 .112	-0.249	327.000	0.803	-0.032	0.129

表7 未修了・修了別の平均値比較

		N	Mean	Std. Deviation	Std. Error Mean	t	df	Sig. 2tailed (p)	Mean difference	Std. Error difference
教材	未修了 修了	108 533	3.16 3.77	1.034 .875	.099 .038	-5.731	139.722	0.000	-0.610	0.106
動画	未修了 修了	108 542	3.32 3.89	1.040 .843	.100 .036	-5.296	136.383	0.000	-0.563	0.106
講師の説明 の仕方	未修了 修了	109 548	3.45 3.98	.908 .715	.087 .031	-5.736	135.908	0.000	-0.529	0.092
小テスト	未修了 修了	110 547	3.29 3.88	.922 .762	.088 .033	-6.295	140.486	0.000	-0.590	0.094
レポート	未修了 修了	104 506	3.13 3.81	.871 .787	.085 .035	-7.808	608.000	0.000	-0.674	0.086
ディスカッ ション	未修了 修了	78 308	2.86 3.31	.879 .895	.099 .051	-4.004	384.000	0.000	-0.453	0.113
学習量	未修了 修了	99 541	3.29 3.78	.704 .775	.071 .033	-5.852	638.000	0.000	-0.489	0.084
担当講師と のやり取り	未修了 修了	69 302	2.96 3.48	.930 .846	.112 .049	-4.260	95.334	0.000	-0.520	0.122
学生同士の やり取り	未修了 修了	67 262	2.91 3.22	.793 .776	.097 .048	-2.914	327.000	0.004	-0.311	0.107

Kruskal-Wallis Testを用いた（表8参照）。

$P < 5\%$ 有意になったものは、教材（0.002）、動画（0.001）、講師の説明の仕方（0.000）、小テスト（0.041）の4項目であった。顕著に表れたのが、40代の平均値が最も高く、次に30代であること。そして、4項目すべてにおいて、この傾向が同じであった。

次のステップとして、聞き取り調査の実施によって、未修了者は、何がどのように不満なのかを第4章にて明らかにする。

4 聞き取り調査と質的分析

アンケートによる量的調査では分からない、発言者のニュアンスや隠れた価値観を発見するために、質的調査を行った。

4.1 未修了者への聞き取り調査

聞き取り調査対象の未修了者29名の属性は、図4に示す。性別：女性12名、男性17名。年齢別：30代2

表8 年齢別の平均値比較

		N	Mean Rank	Asymp. Sig. (p)
教材	20代	38	309.92	0.002
	30代	79	351.08	
	40代	177	346.30	
	50代	206	308.33	
	60代	104	297.76	
	70代	32	227.33	
	Total	636		
動画	20代	38	300.50	0.001
	30代	79	336.65	
	40代	182	361.78	
	50代	207	313.53	
	60代	107	299.47	
	70代	32	235.45	
	Total	645		
講師の説明の仕方	20代	37	268.78	0.000
	30代	80	326.99	
	40代	184	375.88	
	50代	209	317.86	
	60代	108	308.66	
	70代	34	230.71	
	Total	652		
小テスト	20代	38	278.50	0.041
	30代	81	342.54	
	40代	183	350.81	
	50代	210	321.94	
	60代	107	316.40	
	70代	33	269.35	
	Total	652		

名、40代8名、50代10名、60代7名、70代2名。履修別：完全未修了22名、一部未修了7名。コース開始時ログオンの有無：ログオンなし4名、ログオンした25名であり、アンケート調査回答者の属性と比較して、男性がやや多いものの大きな違いはない。

電話による聞き取り調査は、2017年12月5日から12月22日までの18日間で行われ、電話録音を書き起こし内容分析した。質問した項目は表9に示す13項目であった。

Q1 オンライン授業科目受講の理由をまとめると、「放送大学の新しい試みなので、試してみたかった。」が10件、「興味を引く学科であった。または卒業必須科目であった。」が5件、「好きな時間に受講できるから。」が4件、「面接授業に出向くことができない、または困難なので、単位取得は魅力的。」が3件、「オンライン授業のことを詳しく知らないままに登録してしまった。」が3件、未回答が4件であった。特に10件のコメントがあった、「新しい試みを試してみたかった」について、最も意見を代表するコメントは下記のようにであった。

『今日のインターネットワークの普及は目覚ましいものがある。その中で「私の学習」がどのような形で「ネットワーク活用の学習」をすれば良いのか自問して、放送大学オンライン授業を選択した。』

また、遠隔教育の重要な機能について、瞠目すべきコメントがあった。

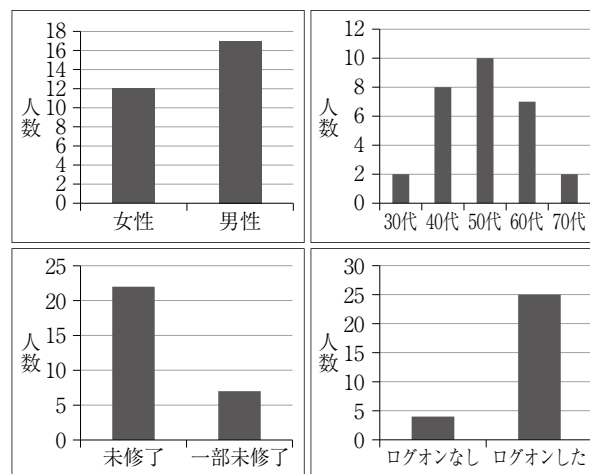


図4 未修了者の属性 (n=29)

表9 聞き取り調査質問項目

Q1	オンライン受講の理由
Q2	テレビ、ラジオのインターネット配信を知っていたか？
Q3	オンライン授業科目で未修了になった理由は？
Q4	オンライン授業について受講前と後での感想の違い
Q5	オンライン授業をどこで受講したか？
Q6	講義ノートやPDF資料はどうだった？
Q7	交流フォーラムを知っていたか？
Q8	ディスカッションには参加したか？どうだったか？
Q9	受講中に不明な点があった場合、どう解決したか？
Q10	講師からのフィードバックについて
Q11	科目間のばらつきについて
Q12	オンライン授業についての改善について
Q13	今後オンライン授業を受講するか？

『身体が丈夫ではないので面接授業をあまり受けることができない。それで、家で学習可能なオンライン授業を取った。』(女性40代)

Q2 テレビ、ラジオのインターネット配信を知っていたか？については、「知っていた。違いも理解している。」が18件、「知らなかった。通常のテレビ、ラジオのインターネット配信とどう違うのかが分かっていない。」が3件、「知っていた。ただし、ここまで違う仕組みの授業だとは思っていなかった。」が3件、未回答が5件であった。

まとめると、多くの受講者がこれまでのテレビ・ラジオ放送授業のやり方と違うことは理解しているが、放送授業のインターネット配信もあり、授業の進め方の違いに戸惑う姿がみられた。

Q3 オンライン授業科目で未修了になった理由は？については、「うっかりしているうちに(学期の途中で忙しくなり)、締め切りが過ぎてしまった。リマインダーがほしかった。」が5件、「思ったよりたいへん。小テストやレポートの締めが厳しくて、仕事と勉強とのバランスが取れなくなったため。」が4件、

「すごく多忙になったため。自己責任です。」が4件、「科目に対する理解度が低くて授業について行けなかった。」が4件であった。ここまでは、通常のテレビ・ラジオ放送授業と変わりはないと考えられる。

オンライン授業独特の理由としては、「オンライン授業の仕組みを理解していなかった。」が3件、「オンライン授業の科目を登録したつもりがなかった。」が2件、「一度ログインした後、科目の存在を忘れてしまった。」が1件、「レポート課題を送信したはずが、送信できていなかった。」が1件、「ログインする方法が分からないまま終わってしまった。」が1件、その他2件、未回答が2件となった。放送大学受講生として体に染みついたテレビ・ラジオ授業の方法とは全く違う仕組みであることの周知がなされていないことが未修了の原因として見受けられた。

Q4 オンライン授業について受講前と後での感想の違いについては、「TVのインターネット配信のように倍速モードがほしい。」が4件、「小テストやレポートの締め切りが厳しい、気が付かずして過ごしてしまう。」が3件、「印刷教材がないので、プリントアウトを大量にしなければならなかった。」が3件、「TVのインターネット配信との違いを理解していなかった。」が2件、「オンライン授業に入ることがこんなに困難と思わなかった。」が2件であった。

オンライン授業独特の理由として、「通信指導の封筒が届かないので締め切りに気が付かない。」が1件、「TV授業は一度落ちてでも次の学期にとれるが、オンライン授業ではとれなかったこと。」の1件がある。

Q5 オンライン授業をどこで受講したか？については、「自宅のPCで」が15件、「家にいるときはPC、出先ではタブレット」が2件、「家にいるときはPC、出先ではスマホ」が2件、「自宅も出先でもタブレット」が1件であった。特にアップルユーザーの「自宅のMAC PC」1件がWindowsのPCとは違うことを強調していた。

Q6 講義ノートやPDF資料はどうだったか？については、「主に全ページプリントアウトをした。」が11件、「主に画面だが、重要な点だけプリントアウトをした。」が2件、「印刷されたテキストがあればいいと思う。」が1件、の合計14件が印刷をすることを好んでいた。一方、「主に画面で見た。」が4件、「重要なところをノートに書き写した。」が1件とプリントアウトを必要としない学習者が5名いることも判明した。

Q7 交流フォーラムを知っていたか？については、「知っていたが、参加していない。」9件、「知らなかった。」6件の合計15件が交流フォーラムに参加していなかった。「知っていた。参加した。」が7件と、参加しなかったグループが参加したグループの2倍存在したことは、今後の運営に大きなヒントを与えた。放送大学のオンライン授業では実名参加としているが、この実名参加についての意見があった。

『実名に慣れたらいいが、一歩踏み出せない人がいるかも。実名ではなく、学生番号ならいいのではない

か？』（50代男性）

Q8 ディスカッションには参加したか？については、「参加した」が7件、「知らなかった」が2件となった。着目すべき点として、「知っていたが参加していない。」が10件あることである。実名参加について問題提起したコメントを拾う。

『参加した。いろんな背景を持った人がいるんだなーと思った。匿名で参加できたらいいなと思った。司会進行があればいいなと思ったが、その際には同じ時間に集まらないといけないかな。』（40代女性）

Q7とQ8から、実名参加か匿名、あるいは学生番号表示のみの参加かによって、学生のディスカッションへの参加の度合いや内容が異なってくる可能性があるということがわかった。ディスカッションの内容によって、実名参加か、学生番号かを選ばせる仕組みを検討する余地があると考えられる。

Q9 受講中に不明な点があった場合どう解決したか？では、「ネットや本で調べて自己解決」が10件、「不明な点はなく、質問することがなかった。」が4件、「誰にも相談しなかった。」が3件、「職場の同僚に聞いた。」が1件。「講師に直接質問した」については、わずか1件であった。

Q10 講師からのフィードバックについては、「満足している」が7件、「機会がなくてよくわからない」が4件、「フィードバックの量と質に不満である」が3件、「まだあまり進んでいないのでコメントはない」が3件であった。

Q11 科目間のばらつきについては、オンライン授業科目を複数受講した学生のみが回答でき、未回答が24件ある中で、「ばらつきがあるが、いたしかたない」が2件、「ばらつきがあるが、それが放送大学の先生の個性である。」が1件、「教科書棒読みの先生がいて悲しくなる。」が1件、「自分の学力のなさで単位が取れなかっただけ。」が1件という結果であった。通常の大学が行っている教育方法である対面授業とは異なっていて、遠隔教育を旨とする放送大学の特徴を受け入れているとの印象をうけた。

Q12 オンライン授業の改善については、多くの具体的なコメントが出た。「単位を落としても、テレビ・ラジオ授業科目のように次学期に再履修可能にしてほしい。」が4件、「小テストやレポートの締め切りを分かりやすくする仕組み（リマインダー機能等）がほしい。」が4件、「ディスカッションを充実させてほしい。（講師やティーチングアシスタントの参入、学籍番号での参加、同時刻の集まり等）」が4件、「事前にオンライン授業について説明がほしい。」が2件、「インターネット配信のように倍速モードがほしい。」が2件、「二つの学期にまたいでゆっくり履修可能にしてほしい。」が2件、「同時刻にネット上に皆が集まる機会がほしい。」が2件。このコメントを下記に示す。

『Gaccoに参加したが、同じ時刻に受講者がネットのある場所に集い、リアルタイムに全員が発言するのは臨場感あった。盛り上がった。（ニコニコ動画みた

いに)。モデレーターもいて、発言を促すこともしていた。15回コースの1回か2回程度、このような集まりがあればいいと思った。放送大学のオンライン講座は孤独感があり、一度受け損なって遅れると、ずるずると遅れる。何か、遅れた学生を拾い上げる手段がほしい。』(50代女性)

他にも、「海外MOOCに負けないようなコンテンツを配信してほしい。」「AppleのMACにも対応したアプリケーションにしてほしい。」「一コマ目は検討のために誰でも視聴可能にしてほしい。」など、具体的な提案もあった。

海外や国内のMOOC (Massive Open Online Course) の事でムークと発音する) では、無料で良質の講義がインターネット上に流れている。これからの放送大学オンライン授業の取り組みは、MOOCを無視する訳には行かない時代であることがわかる。

Q13 (最終質問) 今後オンライン授業を受講するか? においては、「そのつもりだ」が10件、「現在受講中」が3件であった。また、「良い科目があれば取りたいと思う」7件を含めた好意的な返答は未回答を除く26件の77%をしめた。例えば下記のようなコメントがあった。

『現在再チャレンジ中。他の本を読んで学力もつけ、オンライン授業についても理解しつつある。今後もっと、オンライン授業の科目を増やして積極的に勉強する意志は強い。』(60代男性)

『今すぐはないが、教員退職後、いい科目があればやってみたい。オンライン授業のシステムは悪くない。学習センターに出向かなくていいのはとてもよい。』(50代女性)

しかしながら、きびしいコメントとして、「要望したように仕組みが改善されれば、取るかもしれない。」5件、「そのつもりはない。」1件の計6件、すなわち23%の受講者が問題意識を持った返答をしている。具体的な内容を如何に示す。

『他の大学のMOOCと比較されると思いますが、卒業要件になり、キチンと大卒資格になる単位ということで、もっと多くの科目が開設されることを希望します。』(50代男性)

『取るつもりはない。他のMOOCは途中でやめることが出来る。時間(学期)を延長することも出来る。放送大学がいまのままの仕組みだと、今後受講しにくい。』(60代男性)

オンライン授業の企画、設計、運用に際しては、これら未修了受講生の言葉を、重い課題であると受け止めるべきであろう。

4.2 修了者への聞き取り調査

修了者への聞き取り調査対象の32名の属性は、図5に示すように次のようになった。性別：女性12名、男性20名。年齢別：20代2名、30代3名、40代8名、50代7名、60代8名、70代4名。図4との違いは、全員ログオンし、全科目を修了しているため、図は2種類

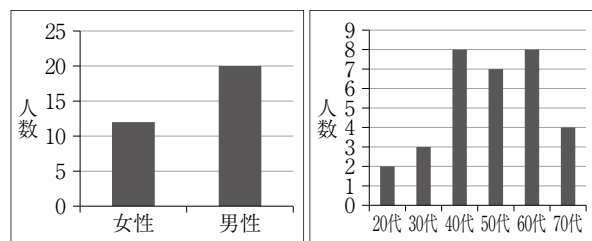


図5 修了者の属性 (n=32)

表10 聞き取り調査質問項目

Q1	オンライン受講の理由
Q2	テレビ、ラジオのインターネット配信を知っていたか?
Q3	オンライン授業について受講前と後での感想の違い
Q4	オンライン授業をどこで受講したか?
Q5	講義ノートやPDF資料はどうだった?
Q6	交流フォーラムを知っていたか?
Q7	ディスカッションには参加したか? どうだったか?
Q8	受講中に不明な点があった場合、どう解決したか?
Q9	講師からのフィードバックについて
Q10	双方向性を強化すべきか?
Q11	オンライン授業についての改善について
Q12	今後オンライン授業を受講するか?

のみとなる。なお、未修了者聞き取り群と比較して当群では、60歳代以上がやや多いことを特記しておく。

電話インタビューは2019年1月19日から2月8日までの17日間で行われ、質問内容は表10に示す12問であった。分析方法は未修了者と同じ方法を用いた。

聞き取り調査結果は、未修了者との違いを浮かび上がらせるため、未修了者と同一意見はここでは割愛し、修了者独特のコメントを記載する。

Q1 オンライン受講の理由は、「他の学生と意見交換できると思ったから」が4件、「仕事に役立つから」が1件あった。

Q2 テレビ、ラジオのインターネット配信を知っていたか? については、「知っていた。違いも理解している。」が30件であったが、「知らなかった。通常のテレビ、ラジオのインターネット配信とどう違うのかが分かっていない。」が1件、「知っていた。ただし、ここまで違う仕組みの授業だとは思っていなかった。」が1件と、少数ながらとまどう学生もいた。

なお、未修了者へ質問した「オンライン授業科目で未修了になった理由」については、今回は対象者全員が修了しているので、質問からはずした。

Q3 履修前に抱いていたイメージと履修後で違った点については、「もっと双方向性があると思ったが、それほどでもなかった。」が11件、「PDF教材がスライドイメージと同じでがっかり、TVコースと変わらない。」が4件、「8回と15回コースがあり、シラバスをよく読んでいなかったの、時間のやりくりで苦労した。」が1件、「参加人数が知れたかった。フォーラ

ムでの活発さを予想するため。」が1件あった。双方向性は期待値が高く、失望度が大きいと考えられる。

Q4 オンライン授業をどこで受講したか？については、「自宅でPCタブレットを同時使用した。」が5件、「自宅でPCを二台並べて同時使用した。」が2件、「自宅PCと学習センターを活用。」が2件と受講者のコンピューター・リテラシーの高さがうかがえた。

Q5 講義ノートやPDF資料はどうだったか？については、「主に全ページプリントアウトをした。」が10件あり、ほぼ未修了グループと同じであるのに対して、「主に画面で見た。」が14件あり、未修了グループの4件に対して修了者には画面で見て学習する傾向が高いことがわかった。

Q6 交流フォーラムは知っていたか？については、「一度参加したが、やめた。」が7件あり、フォーラムへの参加しやすく使いやすい仕組みの導入が望まれる。

Q7 ディスカッションへ参加したか？については、「参加した。」が18件と多数であるが、「知っていたが参加していない。」も6件ある。加えて、「授業になかった。」が8件あった。

Q8 受講中に不明な点があった場合どう解決したか？では、「ネットや本で調べて自己解決」が27件で圧倒的に自己解決の割合が高く、修了者では自律的な学習が定着していることが見受けられた。「講師に直接質問した」は未修了グループと同じ1件のみであった。

Q9 講師からのフィードバックについては、「満足している」が10件、「機会がなくてよくわからない」が7件、「フィードバックの量と質に不満である」が7件と、修了者の方が講師からのコメントに不満を持っている傾向が見受けられた。これは、修了者の方が積極的に講師と関わろうとする態度が強いからであると思われる。

Q10 科目間のばらつきについての質問は未修了者対象であったため、修了者には、『Q11 双方向性を強化すべきか？』を質問した。その結果は、「強化すべきとは思いますが、条件を整える必要がある。特に、TAの参画、ゼミのようなリアルタイムの会合、講師の負担軽減策が同時に展開されること。」が11件あった。強化を望みつつも、その実現性に特に大学院生が疑問を持っていることが分かった。

Q11 オンライン授業の改善については、未修了者と同様、「海外MOOCに負けないようなコンテンツを配信してほしい。」が6件あった。また、「教科を増やして欲しい。教科間の質を均一にして欲しい。」が3件、「受講申し込みをネット上でできないのは時代遅れすぎる。」「学習センターにWiFiを装備して欲しい。」がそれぞれ1件と、仕組みや設備に関する要望があった。

Q12 (最終質問) 今後オンライン授業を受講するか？においては、「そのつもりだ。」が11件、「良い科目があれば取りたいと思う。」が8件あった一方、「卒業・修了なので受講する必要がなくなった。」が8件

と修了者ならではの回答が多くあった。良い科目の継続的な提供と増強が望まれていることが分かる。

5 結論

第2章で提示した本研究の問題意識である、放送大学のオンライン授業では学習者が満足して受講しているのだろうか、または、問題点を抱えながらもやりくりしているのか？未修了者はどのような点でつまずいたのだろうか？のそれぞれの点を下記のようにまとめる。

まず、未修了者の受講理由であるが、「放送大学の新しい試みなので試してみたかった」、「興味を引く学科であった、または卒業必須科目であった」、「好きな時間に受講できるから」をあわせてコメントの66%を占めており、修了者と同様に希望に燃えて受講を始めたことがわかる。ただし、「オンライン授業のことを詳しく知らないままに登録してしまった」が10%あり、オンライン授業の仕組みの周知と広報の改善が示唆されている。

次に、単位を取得できなかった理由、つまずいた点、としては、「うっかりしているうちに学期の途中で忙しくなり締め切りが過ぎてしまった」、「リマインダーがほしかった」が17%ある。また、「仕事と勉強のバランスが取れなくなった」、「すごく多忙になった」、「理解度が低くついて行けなかった」という自己責任の問題が41%を占めている。これらは、形成的評価を重視しているオンライン授業ならではの問題であり、締切日の周知やリマインダー等、受講生が学習のスケジュール管理を効果的に行える工夫が必要であろう。また、「オンライン授業受講者の仕組みを理解していなかった」、「オンライン授業科目を登録したつもりがなかった」17%に関しては、オンライン授業科目登録の仕組みの改善が求められる。

さらに、履修後にイメージと違った点に関しては「小レポートが厳しい」、「印刷教材がないのでプリントアウト必要」が20%あった。よりよいオンライン授業にするための質問では、特筆すべき点として「TV授業は一度落ちても次の学期にとれるが、オンライン授業ではとれなかったこと」13%と、少数ではあるが、オンライン授業科目においても再履修を可とする強い要望があった。

未修了グループの意見の総括として、今後もオンライン授業を受講するかという点では、「そのつもり、現在も受講中、よりよい科目があれば取りたいと思う」をあわせて77%あり、将来の期待感が示された。修了者のグループでの発見としては、未修了者を対象としたインタビューに比べて、比較的、受け答えがポジティブである、ということである。また、大学院生は、学部生に比べて内発的な動機がより強く、関連システムをより理解していて、放送大学のオンライン教育のシステムに対して要望などがより明確であるということである。言い換えると、学びのための「本質」

に興味を持っていると言えよう。

また、コンピューターのリテラシーの低い人には「オンライン教育」は難しい可能性があることを発見した。例えば、授業の中でPDFファイルとしてのレポート提出を普通に要求されると、ファイルや手書きレポートをPDF化することに戸惑ってしまうのである。次に、放送授業や、面接授業との大きな違いとして、「まとめてやる」には不向きである。地道に少しずつ学修を行うことが必須であることを、学習者自身が語っていた。放送大学の従来の授業形態とは異なった学習態度が必要となってくるのである。また、オンライン教育のプロセスや中身に問わず、科目数をとにかく豊富にすることを期待している人が意外と多い。これは、オンライン授業科目の柔軟性が放送大学の学生のニーズに合っていることを物語っていると言える。

未修了の場合の、次学期での再履修を可能にして欲しいという要望が大きい。これは、放送大学内のテレビ・ラジオ放送授業や他のMOOCシステムでは可能であるという比較から来ている。放送授業科目では、日時が定められた単位認定試験が課されていることが再履修可の理由であるが、放送授業科目で可能であるのに、オンライン授業科目では不可能であることの不公平感が受講生の間ではどうしても生じてしまう。オンライン授業科目では、評価活動が単位認定試験といった一発勝負ではないため、又、大学の単位を認定しないMOOCとは異なるため、再履修を可としてしまうと、運用上様々な問題が生じてしまうのだが、そういったシステム上の違いを学生に説明するのは難しい。

海外においてオンライン教育が広く普及しており、またMOOCといった無料で提供されるオンライン講座も増えてきている今日、学習者のオンライン教育に関するリテラシーは日々進化していると考えられる。従来の放送授業の方法を踏襲するのではなく、オンライン授業は放送大学の多様な学生のニーズにあった新しい形の教育を提供するものとして、学生からのフィードバックを常に吸い上げるメカニズムが必要である。まだ放送大学においては新しいオンライン授業ではあるが、本研究において、オンライン授業は大きな可能性を秘めていることが分かった。今後も、学生の声に耳を傾け、分かりやすい授業設計、そして納得のいく教育システムの構築が、よりよい教育に繋がると考える。

5.1 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、第一に、調査の対象者はオンライン授業科目の受講者だけであったので、通常の放送授業、あるいは面接授業との比較で、満足度が高いのか低いのかは判断できないことがあげられる。したがって、この調査結果だけを用いて、オンライン授業が従来の放送授業に比べて劣っている、逆に、優れているとは判断できない。

第二に、本研究においては電話による聞き取り調査を行ったが、電話による聞き取り調査を承諾した学生と聞き取り調査を承諾はしなかった学生とで何らかの特性の違いがある可能性がある。よって、電話による聞き取り調査の結果がオンライン授業科目受講者の代表的な意見だと捉えることはできない。

今後の課題として、2018年度4月から、オンライン授業科目の授業の内容やプロセスに改善策を導入している。プロセス改善後の満足度が変化したかどうか調べる必要がある。オンライン授業に限らず、大学組織として、PDCAを常に回し続けることは、今後の大学の存続にも関わってくるであろう。

本研究が、単発の研究課題としてではなく、IR (institutional research) の一環として恒常的に行われる仕組みづくりが必要であると考ええる。

参考文献

- Aoki, K. and Pogroszewski, D., (1998). "Virtual university reference model : A guide to delivering education and support services to the distance learner". *Online journal of distance learning administration*, Vol. 1 No. 3, pp. 1-15.
- Galusha, J. M., (1997). "Barriers to Learning in Distance Education". *Interpersonal Computing and Technology Journal*, Vol. 5 No. 3, pp. 6-14.
- Phipps, R. and Merisotis, J., (1999). "What's the Difference? A Review of Contemporary Research on the Effectiveness of Distance Learning in Higher Education", *Journal of Distance Education*, Vol. 1 No. 1, pp. 102-114.
- Sherry, L., (1995). "Issues in Distance Learning", *International Journal of Educational Telecommunications*, Vol. 1 No. 4, pp. 337-365.
- Vermunt, J. D., (1992). *Learning Styles and Directed Learning Processes in Higher Education : Towards a Process-Oriented Instruction in Independent Thinking*. Lisse : Swets and Zeitlinger.
- 青木久美子 (2005) 「学習スタイルの概念と理論—欧米の研究から学ぶ」『メディア教育研究』2 (1), pp. 197-212.
- 放送大学 (2017) 『Vision'17—放送大学新時代—』
https://www.ouj.ac.jp/hp/gaiyo/pdf/Vision_17.pdf
(accessed 4 September 2018)
- 放送大学 (2013) 『放送大学沿革』
https://www.ouj.ac.jp/hp/30th_anniversary/ayumi.htm
(accessed 3 September 2018)
- 放送大学プレスリリース (2018) 『卒業生・修了生総数が10万人を突破』
<https://kyodonewsprwire.jp/release/201801260298>
(accessed 3 September 2018)
- 文部科学省白書・学制120年史編集委員会 (2009) 『放送大学の創設』
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318306.htm (accessed 3 September 2018)
- 山田恒夫 (2011) 「大学における教育コンテンツ公開システムの将来」『メディア教育研究』7 (2), S50-S61.

(2018年10月31日受理)